

文学に現われた安楽死

関 口 正 和

I は し が き

人間の平均寿命が延びるのはおおむね世界的な傾向のようであるが、わが国においてもそれは男女とも70歳を越えるところにまで達している。これはとりもなおさず老人人口の激増を招来し、老化した肉体の疾病に苦しむ者が続出する可能性を示唆するものと言えよう。老人の場合にのみ病苦がかかわりがあり中年及び若年層の人間にはそれがまったく無縁のものであると言うつもりはない。しかしごく一般的に言って、後者よりはむしろ前者の方に細胞の老化現象、肉体の衰弱化が著しくみられるのは明らかである。肉体の老化は多くの場合疾病を伴いやすい。そして不幸にも病苦にさいなまれた挙げ句死を迎える者もすくなくないようだ。このような観点から老人人口の増加は社会的問題の一つとしては疾病の問題に、ひいては死の問題に帰着されることが多いと考えられる。具体的に言えば疾病が比較的良質のものである場合には当然対象としては除外されることが考えられるが、問題にされるべきものはそれが極めて悪質のもので、治ゆ不能とみなされ、かつ耐えがたい激痛を伴う疾病に苦しめられている患者の場合であろう。この状態にまで追いこまれた患者を待つものは、肉体の死である。そこでこのような肉体における死が不可避のものであるからには、人間にとって普遍的な問題の一つとされることは、「いかにして安楽な死をとげるか」ということであろう。「安楽死」の発想は根源的にはここから芽生えてきたとみなされる。長谷川泉氏は「終末は滅亡であり死であり、すべてのものに終末が避けられないとするならば、終末をよりよく迎えることは、一種の合理主義である……

終末処理の叡知は、人間の歴史とともに始まっている。人間が人間であるかぎりには、そこに叡知がはたらき、一種の合理主義がきざすのは当然ともいえる」¹⁾ との見地から「安楽死」を考察している。小論の目的は「安楽死」をめぐる問題の一側面を取り上げることであるが、それに際しては次の点をお断りしておかなければならない。つまり「安楽死」を検討する場合、初めに留意しなければならないと思われるのは、このなかには多様な問題が含まれているということである。まずこれが「社会学」、「医学」、「倫理学」、「哲学」、「法律」、「宗教」、「文学」などのジャンルに大別的に区分されうること、そしてこれらの視点から考察される必要があるということである。しかし、当面の問題としてこれらの区分に示されたすべての問題点にわたって「安楽死」を論ずることは、時間的にも能力的にも筆者には荷が勝つことである。したがって小論では「文学」の側面から、それも英国、米国、ドイツ、それに日本を加えた4か国の作品を中心とした『文学に現われた安楽死』という問題にのみ限定して、「安楽死」にまつわる問題の一部を検討してみることにする。

II 安楽死の概念

文学上の安楽死をめぐる問題を取り上げるまえに、安楽死の概念を明らかにしておきたい。わが国における安楽死問題研究の第一人者と目される太田典礼氏の説くところを、氏の著書『安楽死』²⁾の序章「安楽死の概念」を通じて詳しく引用させていただくことにする。

1) 長谷川泉『現代のエスプリ 83 安楽死』至文堂、6-7ページ。

2) 太田典礼『安楽死』クリエイイト社、10-15ページ。

日本語の「安楽死」という語はドイツの Euthanasie, フランスの euthanasie, アメリカ及びイギリスの euthanasia という語に相当する。元来ギリシャ語の Euthánatos に由来するもので, eu は「美しい」「楽な」「善い」等の意味を有し, eúphoros (Euphorie, euphorie, euphoria=幸福感) という語が示すように, 精神的な意味にも用いられた。thanatos は死を意味する。したがって肉体的, 精神的に安楽に死んでゆくさまをいったのであろう。このことは日本語の「安楽死」という語にもあてはまる。もともと中国及び日本で仏教用語として「安楽世界」, 「安楽行」, 「安楽浄土」, 「安楽の法門」のように用いられてきたのであり, 孟子も「生_一於憂患_一, 而死_二於安楽_一」といている。「安楽死」という言葉そのものは, 本来特別な死を意味していたのではなく, 苦しみのない「良き死」であり, いつかは訪れる生命の消滅なのである。眠るように死ぬ老人の最期であって, 衰弱が進み, やがて死んでゆく大多数の者の死なのである。

しかし, 現在の「安楽死」という言葉は, このほかに三つの意味内容をもって使われている。第一に, 社会的有用性を喪失した生命もしくは自己実現の可能性もない生命を, 自然の死に先立って絶つ行為を意味する。これに該当する事実は古く人類の原始集団社会からはじまり古代へも引きつがれて, おぼすて山や毒人参をのむなどの風習を生んだが, まだ安楽死の概念とはいえない。

安楽死は近代思想である。トマス・モアが『ユートピア』(1516年)で空想の島における法律に安楽死を規定したのがはじまりであるが, この思想を受けついだのが哲学者のフランシス・ベーコン(1561—1626年)で, ユータナジアという言葉は彼が有名な『新組織』(Novum Organum)の中で使い出したものである。ベーコンは「健康を回復し, 苦悩疼痛をやわらげるのは医者職務であるが, この緩和は健康を回復させるときばかりでなく, 安らかな美しい死に導くときも同様である」とした。しかし, 現代的

意味の安楽死が問題視され出したのは19世紀になってからである。その起こりは人道的, 良心的な医師たちで, 患者の瀕死の苦悶に直面して考えさせられたのであった。1837年トレマッチは安楽死問題の将来を予想して「不治の病人に対する治療法」という論文を発表している。イタリアでは19世紀にノーベルが絶望患者を収容する安死院をローマとミラノに設立しようとしたが, この計画は首相クリスピーに葬られてしまった。しかし, その後医師の安楽死行為は犯罪か, 許さるべきか, ということが法律上の問題になって論議が起こり, 肯定論者が医師と相たずさえて, 各国で安楽死の合法化運動が起こり法案がつくられ, 自己実現の可能性を失った生命を安楽に死なせてやる行為をも認めようとしているが, まだこの国でも認められていない。ところがドイツのヒットラーがナチス刑法で安楽死計画に基づいて精神病患者やユダヤ人の大量虐殺を行ない, ビンディングとホッヘがこれを是認して「生きる価値なき生命の抹殺」を発表したので, 安楽死の解釈が異様に拡大され, 安楽死が誤解されるもとをつくった。

安楽死の第二の概念は, 激烈な肉体的苦痛を伴う不治の傷病者を安楽に死なせてやることを意味する。第一のものを広義の意味における安楽死とするなら, 第二のものは, ずっと限定された狭義の安楽死である。現在普通に安楽死と呼ばれるのはこの第二の意義におけるものである。最後に第三番目のものは, 法的な意味における安楽死の概念である。安楽死が法的に許されるか否かが論じられるためには, その評価される対象が適確に分析されていなければならない。何故にいかなる範囲において殺人罪, 嘱託殺人等の罪, 過失致死等の罪の成立が阻却されるのかを決定するに当たって, 法的に重要な要素を考慮しつつ広義の意味における安楽死及び狭義の安楽死が分類し直されなければならない。第一及び第二のものは, 安楽に死んで行く客体による分類であった。したがってこの第三の概念とは質的に異なっている。その限りにおいては, これを他の二つとパラレルにならべること

は許されないであろう。実際今日刑法上問題になっている「安楽死」は、第二の狭義の安楽死に限られているといっても過言ではない。不治と判断された傷病者が激烈な肉体的苦痛にあえいでいる時に、その傷病者を安楽にしてやる行為の適法性如何が多くの場合論じられているからである。たしかに、単に「安楽に殺してやることは許されるか」という問よりは明確なものと見える。しかし、法的な許容性が論じられるためには、第一及び第二の安楽死の概念が、法的な概念として、客体・行為者・その意図・行為の態様等に基づいて、より多くのものに分類されることが重要である。

このように一口に「安楽死」といっても、その概念は種々に用いられ、そのためか多くの異なった語が用いられている。ドイツではオイタナジーのほか美しい花など (Schöner Tod・Sterbehilfe・Todeslinderung・Gnadentod・Gnadentod. Totung zur・Befreiung von unheilbarem Leiden) が用いられ、英米では慈悲殺、安易死など (mercy killing・easydying・artificial euthanasia) が使用されている。日本でも安楽死と呼ばれるようになったのは第二次大戦後で昭和23年の『リーダーズ・ダイジェスト』がはじめてこの訳語を用い、特に昭和25年4月14日に東京地方裁判所で判決のあった嘱託殺人事件において、滝川政治郎及び加藤隆久両弁護人が用いて以後のことである。それまでは「安死術」という語が広く刑法学者の間では用いられていた。その他速死術・苦悶緩減致死・死苦緩和・死戦苦除去術・慈悲の介錯・慈悲殺・オイタナジー等が用いられた。これらの語は行為の能動性・意味内容を明確に言い表わしているものが多い。

太田氏は、このように安楽死を概念規定しているわけであるが、小論に取り上げる7作品について言えば、それらは第一か第二の概念のいずれかに包含されるものと言えよう。

Ⅲ 文学に現われた安楽死

前述されたように、安楽死の先蹤は社会思想史の古典トマス・モアの『ユートピア』³⁾に見

いだされる。この作品はモアがオランダに外交使節として派遣されたとき、アントワープでラファエル・ヒスロディという架空の人物に紹介され、彼から聞いた理想国についての物語という体裁をとっている。内容は二巻から成り立っており、第一巻は国家の状態についての物語、第二巻はユートピアにおける政治と法律制度、都市、役人、知識・技術よびの職業、生活と交際、旅行、奴隷・病人・結婚、戦争、宗教などについての九章に分かれている。モアがヒスロディに語らせている社会は、要するに理想的な共産主義社会である。安楽死の発想は、この中の第7章「奴隷・病人・結婚」の冒頭で展開されている。モアはその中においても、中世のキリスト教が自殺を罪惡視したのに対して、合理性に支えられたギリシャ・ローマの倫理思想の再興を志向しており、安楽死について次のように書き残している。

「病人の取扱いには、私が前にいったように、細心の注意が払われている。医薬や滋養物などいやすくも健康回復に必要なものは、何一つとして病人に不自由させることはない。不治の病に悩んでいる者があれば、その人の枕許に坐っているいろいろな話をしてやるなど、あらゆる親切を尽してその心を慰めてやる。しかしもしその病気が永久に不治であるばかりでなく、絶えまのない猛烈な苦しみを伴うものであれば、司祭と役人とは相談の上、この病人に向って、これ以上生きていても人間としての義務が果せるわけではないし、いたずらに生恥をさらすことは、他人に対して大きな負担をかけるばかりでなく、自分自身にとっても苦痛に違いない、だからいっそのこと思い切ってこの苦しい病気と縁を切ったらどうかとすすめる。また、今は生きていこうとこと自体が一つの拷問ではないのか、も

3) *The Utopia of Sir Thomas More* translated by Ralph Robinson (Macmillan), pp. 109-110. 平井正穂訳『ユートピア』(岩波文庫), 131-132ページ。

しそうなら死ぬということに対して臆することなく、いや、むしろ前途に明るい希望をもって、この牢獄とも拷問ともいえる業苦の人生を、一思いに自らの命を断って脱するか、それとも他人にその労をとって貰って脱してゆくか、そのどちらかにしたらどうか、とすすめるのである。そしてなおその上、死ぬことによって人生の楽しみが少しでも失われるものではなく、むしろただ苦痛を癒されるにすぎないのであるから、死ぬことがどんなに賢いことであるかを説明してやる。この行為は司祭の、つまり神の意志を説く者の忠告に従うことである、したがってこれこそまさに信仰者に相応しい行為である、といってきた。こうやって充分納得した病人は、自らすすんで絶食して死んでゆくか、死の苦しみを味わうことなく眠っている間に死んでゆく。勿論死ぬのを嫌がるのを無理に死なせることはないし、またそういう人をおろそかに扱うこともない。かようにすすめられて死ぬことは名誉ある死と信じられているからである。これに反して司祭や市会が死の当然の理由を承認しない前に、自分の生命を断った者は、土と火をもって葬るのに相応しくないものとされ、その死骸は悪臭ただならぬ泥沼の中に捨てられることになっている。」

ここで述べられているのは、太田氏の概念規定を適用すれば、「肉体的激痛を伴う不治の傷病者を安楽に死なせる行為」と規定された第二の概念での安楽死である。具体的には絶食による方法しか示されておらず、睡眠中の死というあいまいなものがつけ加えられているにすぎないが、ただ一つ興味深く思われるのは、安楽死をすすめる発想である。このような、安楽死を「勧告」する発想法は、人類の未来社会にそのほう芽の可能性を必ずしも否定し得ないことを想定するとき、人類の未来を予言したものとならないこともないように思われるだけに着目さ

れてよい。

先にもふれたように、現代的意味の安楽死が問題視され出したのは19世紀以降であり、医学及び社会的見地から、それぞれトレマッチやノーベルなどが見解を公表したわけであるが、文学上の見るべき作品としては、トレマッチよりおくれること50年にしてドイツのテオドル・シュトルムが1887年の10月に『ウエスターマン』誌に発表した中編小説『告白』⁴⁾がある。若干長くなるが、煩をいとわず作品を関係部分に限定して要約してみよう。この小説は医師フランツ・イエーベが親友のハンスに心境を告白する形をとっている。

フランツ・イエーベは大学卒業後婦人科の医者として開業し、有能さの故にやがて町一番の名医の評価を得るようになる。ある秋の晩古い患者であり親しい年長の友人でもある弁護士ヴィルム・レンテの家を訪れると、彼はそこの居間でレンテ夫妻からスイスの少女エルジ・フュースリに紹介される。数か月後にフランツとエルジは婚約しその少しのちにレンテの家で挙式する。かくてイエーベ夫妻は幸福な結婚生活が続けるが、その4年目の5月に妻のエルジはがんにかかる。

「……この病気は当時の学問では絶対に不治のものとされていた。潜行してきて、人間の力の限度を越える苦しみを与えたのちに、必ず死をもたらすものと、きまっていた。……それは腹部の病気の一つで、多くの婦人が、たいていはずっと年をとったのちだが、命を取られるものだ。それはたちまち頂点に達して、どんなに希望がありそうにみえてもだめなのだ」⁵⁾

エルジががんにかかって苦しみ始めたころから、フランツは幾夜もひとりでベッドのそばで付き添っていた。血の気もなく、しぼんだ花の

4) テオドル・シュトルム『告白』(Ein Bekenntnis), 高橋健二訳(角川文庫)。

5) 同訳書, 42-43ページ。

ようになっているエルジを見るにつけ「予期される最善は、できるだけ早い死だ」⁶⁾ということを彼は知っていただけに、気も狂わんばかりになる。エルジは再三襲ってくる激痛に耐えかねて、フランツにその苦しみから救って楽にしてくれるようにたのみ、最期の際の処置についても望むところを訴える。

「その時になったら、わたしのお願ひしたことをしてね！ あなたの用だんすの小さい引き出しに——けいれん一つしないで眠れる魔薬を持ってらっしゃるわね！」⁷⁾

その翌日、日が暮れてからフランツは再びエルジの様子を見に寝室へ入って行く。

「ぼくは、エルジがあいかわらずベッドを置きつづけていたぼくたちの寝室に行った。看護婦がベッドのわきに立って、病人がおちつかぬため乱れた金髪をととのえていた。しかし、ぼくがはいると、エルジは頭をひるがえして、美しい病みやつれの顔をぼくのほうに向けた。『もういいわ、ヤンスさん！ そのままにして！』と彼女はせわしく言い、それからぼくに言った。『わたしのそばにいて、フランツ！ あなた——ひとりだけで！』そして、せつない別れでもするように目を輝かしてぼくを見た。

「看護婦にはうちに病気の子どもがいた。ぼくは彼女を翌日のいつもの時間まで帰してやった。——ぼくたちだけになると、ぼくはいつものとおり、ベッドのはしに腰かけて、エルジの頭をぼくの胸にいだいた。彼女はそっとぼくにすがった。『ああ、フランツ、あなたのそばにいるのは、なんていいんでしょう！』ぼくたちはしゃべらなかった。長い幸福なひと時だった。ぼくの心臓も穏やかな鼓動を取りもどした。

「その時、突然彼女は叫び声をあげた。人

間の目には見えない悪魔によってぼくの腕の中のからだがゆすぶられるのを、ぼくは感じた。悪魔は魂を抜こうとするが、それができないかのように思われた。『フランツ、ああ、フランツ』それがやっと出た最後のことばだった。それで彼女は声が出なくなり、救いの叫びさえ、食いしばられた歯のために砕けてしまった。それから彼女はぐいと激しく頭を振りあげた——ぼくはそれまでどこでも、苦しみのためそんなに引きつった人間の顔を見たことがなかった。かろうじて目の中から、流れる星のように瞬間的に一つの光がぼくの目の中に飛びこんだ。——絶望と熱い懇願のあふれるばかりにこもったまなざしだった。彼女は一言いおうと努めたが、言えなかった。発作がくりかえし起こった。ぼくは命のあらゆるやさしい霊によって投げ倒されたような気がした。愛も同情も慈悲も、途方にくれた男にとっては恐ろしい悪魔になった。ぼくは自分がまったく無であって、不幸を傍観するだけの定めをになっているような気がした。その時——ふいにぼくは小さいピンを左手に持っているのを感じた。ぼくはぞっとした。依然として妻を抱いていた。それから瞬間が来た……」⁸⁾

エルジが亡くなってから何週間か経過したころ、偶然にもフランツは、絶対的な信頼を寄せている大学時代の恩師の論文を医学雑誌で見つける。

「ぼくは雑誌をめくり、個々の論文の表題と初めのところを読んだ。すると、ぼくの目は一つの報告の上に落ちた。その筆者として、わが国の最も著名な権威者の名が記してあった。その人が印刷して意見を発表することはごくまれだった。ぼくはその雑誌をもってソファーに横になり、読みはじめ、読みつづけているうちに、ぼくは両手

6) 同訳書、44ページ。

7) 同訳書、46ページ。

8) 同訳書、48-49ページ。

をあげて、ギロチンが落ちてくるような死の恐怖に打たれた。筆者は婦人の下腹部の疾患について書いていた。まもなくぼくはそこに妻の病気が一步一步、ふるえる命の糸をぼく自身が断ち切った頂点に至るまで、記されているのを読んだ。そしてひとつの文章にぶつかった。さながら燃える活字をもってのように、それがぼくの心に焼きつけられた。『これまで』——そう書いてあるのをぼくは二度三度くりかえし読んだ——『この病気は絶対に致命的だと考えられていたが、余は以下に一つの処置を報告することができる。それによって五人の婦人のうち三人が生命を取りもどし、家族の手にかえされることが可能となった』それから先は読まなかった。ぼくの目はその上をただかすめるだけだった。それでもう十分だった。……ぼくは雑誌のカヴァーをめくり返して、もう一度、そこに印刷されている発行日を読んだ。それはまぎれもなく、ぼくがエルジの死の二週間まえ郵便配達夫から受け取って、神ならぬ身の知るよしもなく、引き出しに投げこんだあの月だった。』⁹⁾

三年後フランツは、枢密顧問官ローデン夫人を診療し、夫人の令嬢ヒルダの献身的かつ厳格な看護も得られて、彼の助手と隣町の腕ききの若い医者への援助のもとに手術を成功させる。これについて彼は次のように述懐する。

「この新しい処方によれば、おそらくエルジの命を救うことができただろうのに、彼女を殺してしまったということは、もうぼくの重荷ではない——ぼくが忍んでいるのはもっと重いものだ——それはあまりつらいので、できるものなら、空虚な空間にそれを投げ捨てるために、地のはてまで走れたらと思うほどだ。ねえ、ハンス、少数の医者しか知らないことがあるのだ。ぼくは

医者に生まれたと思っていたが、みずからその犯罪人になるまでは、それを知らなかったのだ」

彼は息をついた。「それは生命の神聖さだ」と彼は言った。「生命こそ、いっさいの上に輝く炎だ。そのなかで世界は生成し、滅ぶ。この神秘に向かっては、いかなる人間も学者も、死のためにのみなすのであるならば、手を伸ばすことは許されない。その手は殺人者の手のように邪悪なものとなるのだから！」¹⁰⁾

作者シュトルム自身ががんによって生命を奪われているのであるが、彼が果たして安楽死を是認しているのかどうかは必ずしも明らかではない。だが、この主題を「医学の可能性に否定的であった悔恨と早まった失策へのざんげ」¹¹⁾とみるならば、この小説は安楽死批判の作品ととれないこともないようだ。

今世紀にはいつてからの安楽死の例としては、まず英国の作家D. H. ロレンスが1913年に出した長編小説『息子と恋人』の母親モレル夫人の場合が考えられる。ロレンスはその中で、恋人ミリアム以上に深く愛していた母親モレル夫人を安楽死させてしまう息子ポールの苦悩を描いている。モレル夫人は、牧師レンショウの『あの世にはあなたのお父さまも、お母さまも、女のごきょうだいも息子さんもいます』と言って彼女の現世への未練を断ってやろうとする言葉に反論して、『あの人達とは永いあいだ用のなかった人達です。今ではあの人達がいなくてもやっていけます。死んだ人はほしくありません。生きてる人がほしいんです』¹²⁾と言い、さらに『母さん、ぼくはもし死ななくちゃならないんなら死ぬ。死ぬ意志がある』とのポールの言葉に『おっかさんに意志がないっていうのかい？ お前は死にたい時に死ねるのかい？』¹³⁾と反ば

10) 同訳書、68-69ページ。

11) 長谷川泉、前掲書、16ページ。

12) D.H. Lawrence, *Sons and Lovers* (Penguin Books), p. 471. (三宅幾三郎・清野暢一郎共訳『息子と恋人』下巻、角川文庫、164-165ページ)。

13) *Ibid.*, p. 472. (同訳書、165ページ)。

9) 同訳書、55ページ。

くして、がんの末期で、モルヒネによって激痛を辛うじておさえている状態でも、生への執着は強く、死など考えてはいない。ポールは母のその苦痛を見ることに耐えられず、医者に打つべき手を尋ねる。だが医者は頭を横に振ってもう幾日ももたないと言うのだった。ある晩のこと、ポールは姉のアニーと二人だけになったとき、思いあまってモルヒネをまとめて母にのませることを姉に打明ける。姉も承知したので、ポールはその夜あるだけのモルヒネの丸薬を集め、念入りにつぶして粉にし、母が夜飲む牛乳にまぜる。その晩九時に、ポールは吸呑みに熱い牛乳を入れて二階の寝室へ持って行く。母は一飲みしてあまりの苦さにいぶかるような暗い眼でポールを見て言う。

「まあ、何て苦いの、ポール！」と母は少し顔をしかめて言った。

「お医者さんが母さんに飲ますようになってくれた新しい催眠薬なんだよ」とポールが言った。

「これを吞めば朝になってもいつものようにはならないって、お医者さんが言ったんだよ」

「そうあってほしいね」と母は子供のように言った。

母はまた牛乳を少し飲んだ。

「でも随分まずいね！」母は言った。

吸呑みをおおさえた弱々しそうな母の手と、少し動いている唇をポールは見た。

「そう、ぼくも飲んでみた」とポールが言った。「でも後で何んにも入らない牛乳をあげますよ」

「そうだね」と言って母は飲みつづけた。子供のようにポールの言うことをきいた。ポールは母には分っているのではないかしらと思った。やっとの思いで飲んでる母の哀れなやせ細ったのどが動くのをポールは見ていた。¹⁴⁾

苦い牛乳を全部飲みほして、母は床につく。やがて大きないびきのような息づかいが聞えてくる。息と息の間が長く、非常に不規則な音を家中に響かせていた。そして翌日の11時ごろ彼女は亡くなる。

生命の充足、よりよき人生、完全燃焼志向型の人生を思わせるH. D. ロレンスの足跡を想うとき、絶望的ながん患者を安楽死させる彼の発想は部分的には把握できないではない。だがあくまでも部分的にである。つまり彼がこのような小説展開を試みたうらには並々な微妙な感情がはたらいたのではないかということである。彼には、あくまで現世への執念断ちがたく露骨なまでに牧師に自己の情念を語り示してしまふ母親の希望をかなえてやりたい愛と、彼女の耐えがたい激痛を見るに忍びず医師の診断もあることから一思いに楽にさせてやりたいというあわれみの情が矛盾する要素としてはたらいっており、そのうえ、おそらく彼は無意識裡に彼女の死がポールの自己充足の障害除去にひ益するところが多いと考えてもいたのではないか。換言すれば彼の内なる場では、一種のアンビヴァレント (ambivalent) なものが作用していたのではないか。いずれにせよ、ロレンスにおける安楽死の発想は、その生命観が必ずしも単純素朴なものではないだけに、他の例とは一律に論じきれないものがあるように思われる。

これが次のような状況下では別の角度から意識されることになる。数千年後、中央委員会の統制のもとに、人間はだれしも地下に住み、その生活様式はすべて機械仕掛けで操られる小部屋に住むように規制されている人間を想定してキャリキャチュアした作品、1928年に発表されたE. M. フォースターの短編小説「機械は停る」¹⁵⁾の場合である。この世界では老人や病人のみならず、普通の健康な人間にとっても安楽死をとげることは、いわば悦楽の境地にはいるにも等しいこととされているらしく、安楽死の適用はすべて許可制になっており、死亡率は出

14) *Ibid.*, p. 479. (同訳書, 176ページ).

15) E. M. Forster, *The Machine Stops* (Collected Short Stories, Penguin Books), p. 138.

生率をこえることは許されず、機械専横の徹底した合理主義的発想の状況下においての、いかなれば「合理的安楽死」だけが容認され「理解」されている。

時代変わって1953年に書かれたイーヴリン・ウォーの「廃墟の恋」¹⁶⁾で取り上げられている安楽死にもほぼ同様の趣きを感じられる。この短編小説は人類の未来についての予測を悲観的にとらえたものの一つである。この種の作品で直ちに想起されるものと言えば、オールダス・ハックスリーの『猿と本質』(*Ape and Essence*)やジョージ・オーウェルの『1984年』(*Nineteen Eighty-Four*)などがある。これらの2作品では入念に人類の未来図が風刺されている。たとえばジョージ・オーウェルは、その長編小説『1984年』の中で、絶対的権力が支配者から人間性を奪う効果を強調して読者に訴えているが、イーヴリン・ウォーはこの短編小説で、絶対的権力が被支配者にいかなる影響を及ぼしているかを強調している。そして、つまるところ、このような雰囲気のもとでは、きわめて退屈な社会が実現し、一般大衆は安楽死を切望するようになるだろうというわけである。この風刺の矢は1948年に施行された国民保健法(National Health Service Act)の提案母体であるベヴァン・イーデン連立内閣とその権力機構に向けられている。

「安楽死制度は、1945年に制定された最初
の健康保健制度にはふくまれていなかった。
これは高齢者や死病にかかっている患者
の票をかき集めようという、トーリー党
の発案だった。ベヴァン・イーデン連立
内閣時代にこの条項が一般にも適用され
るようになると、たちまちにして人気を
博した。教員組合はこれを問題児に適用
することを要求した。この恩典に浴そう
という外国人が殺到しすぎたために、移
民局は、現在、片道切符しか持ってい
ないものは追い帰していた。」¹⁷⁾

16) Evelyn Waugh, *Love Among the Ruins* (*The Ordeal of Gilbert Pinfold*, Penguin Books).

この国にみられる安楽死の方法はシアン化物による毒殺である。その処理は安楽死課にゆだねられているのだが、毎日10時には、福祉社会に倦んだ市民たちがそのドアに殺到するので6人ずつに分けて処理しなければならないほどなのだ。安楽死課の患者窓口にできたそのドームを半周するほどの長だの列を潜望鏡でのぞいていた年老いた課長のドクター・ビーミッシュは、そこを訪れる市民たちが、人生最期の始末にも自ら努力しようとしめない世相を慨嘆する。

「わたしの両親は自分の用意した物干しの綱をつかって、裏庭で自分の首を吊ったんだ。近頃の連中ときたら、自分のことには指一本動かそうともせん。今だっておぼれるつもりなら河がある、汽車だって——たまにゃ——走ってるんだ、ひかれりゃいいのさ。家によっちゃ、ガスだって使える。死ぬ方便なら国中にごろごろしてるんだ、それなのにだれもかもここばかり頼る。」¹⁸⁾

深刻にして微妙な安楽死の問題も、ここまで戯画の対象そのものとされてしまうと、ブラック・ヒューマーの観さえある。しかし、ここには笑ってすまされない皮肉な可能性が秘められているのではないか。社会福祉制度の充実是一般論としてみると、けだし合理的発想法の社会的風潮の産物であろう。そのような社会で問題点のことごとくが合理化をもって了とされることから合理的解決を迫られるとすれば、安楽死といえども例外ではあり得なくなりはないだろうか。すべては合理化の波に押し流され、対象化されてしまうかもしれない。トマス・モアの『ユートピア』、E. M. フォースターの「機械は停る」、それにこのイーヴリン・ウォーの「廃墟の恋」にみられる安楽死の発想は、モアのようにユートピアを肯定的にみるか、あるいはフォースターやウォーのようにそれを否定的、

17) *Ibid.*, p. 194. (小野寺健記「廃墟の恋」, 白水社, 262ページ).

18) *Ibid.*, p. 197 (同訳書, 265ページ).

つまり反ユートピア (Kakotopia or Dystopia) 的にみるかの違いはあっても、ごく一面的にみれば一つの類似点を有していることが分かる。つまり安楽死を原則として肯定し、それをいわば合理的に処理しようとしている点である。社会体制十全の発想を極限にまでおしすすめると、究極的には安楽死のごとき微妙な問題さえも、このような発想で処理されてしまう可能性は必ずしも皆無とは言えないことを示唆しているようにも思われる。

これまで考察の対象としてきた作品が想像力の豊かさにあふれているとはいえ、所せん創作のわくのなかにとどまっているものであるのにひきかえ、リール・タッカー・ワートンベーカーという婦人の著書『安楽死—愛は死をみつめて』¹⁹⁾になると、実録的手記であるだけに、ごまかしようのない生々しさと迫力をもって読者に迫ってくるものがある。この作品は夫ワート (ワートンベーカーの愛称) ががんに冒されているのが診断され、安楽死に至るまでの3か月あまりの期間を、夫の手記をもまじえて妻のリールが克明に描写したもので、全体は16章から成りたっており、最後の16章でついに安楽死をとげる様子が伝えられている。部分的に抽出してみよう。

『日ましに悪くなる』12月26日の手帳には、ほとんど読めないような字で、こう記されてある。そしてその日の午後にワートはわたくしが恐れながらも予期していた言葉をついに口にした。『いよいよ、時がきたようだ』

『こわい?』とわたくしは彼にたずねた。
『うん、まあ』と彼はひとめした。

わたくしはもう一日のぼしてくれと彼にたのみたかったが、そうはしなかった。その夕方、ほんのしばらくさし込みがおそってきた時、わたくしはそうたのまなくてよ

かったと思った。十時にわたくしたちは二階にあがった。……ワートはわたくしが下においてお湯をわかし注射器を煮沸しているあいだに、もう一度モルヒネのパンフレットに眼を通していた。彼はほかの薬が効かなくなった時に使っていた、すでに分けてあったモルヒネの許容量をもう一度丁寧にはかりなおした。そして、まず少量を注射したが、それは吐き気の危険をさけるためにしたものと思う。それから二十分待っているあいだに、彼はモンテーニュの本を手にして、それに日附を書き、ジョン・ハーシーへの伝言をそこに書き込んで、それをわたくしに送るようにいった。それから彼はすでにはかっておいた白い丸薬を手にとり、それをとくした。それは完全にすき通って、水のように見えた。

『さあうつぞ』と彼はいい、脛に多量の薬を注射しはじめた。彼の手はふるえた。そして一本の針を曲げて折ってしまったが、薬は助かった。すると彼は、『えい糞、この薬を無駄にさせないでくれよ』といった。

彼は理論的には十二粒のモルヒネで大丈夫死ねると思っていたが、確実に期してさらに三粒ふやした。それから枕の上に横になり、わたくしはそのわきに腰かけて、彼の手をにぎった。

『ぼくはお前を愛している。ぼくはまったく素晴らしい生涯を持った』と彼は言って、ぐったり死んだようになると、眼をとじた。

間もなく彼は片方の眼を開けた。『紫色のもやが、約束通りたちこめてきた』と彼はいった。『だけど、「マーティンがここに来るまでは、われわれにはなににもできん」だよ』

もうしばらくすると、彼はふたたび片方の眼を、ついでもう一方を開いていった。『紳士というものは、自分がこの世にいとまを告げる時を心得ているべきなんだ』それは長くて深いまなざしであり……今にも

19) Lael Tucker Wertenbaker, *Death of a man* (Random House), (高橋正雄訳『安楽死—愛は死をみつめて』, 講談社)。

息を引きとるかに見えた。

彼の心臓は時には早く、時には非常にゆっくりと打っているように思えたが、それはたえず強く、しっかりと打ちつづけていた。非常にゆっくりはあはあいっていた呼吸が、急にせわしくあえぎ出した。どのくらいの時間がたったのかわたくしにはわからなかったが、突然彼は両眼を開いて、いら立たしげに、『ぼくはどうも死にそうもない。なんだか恥かしいみたいだ』といった。……彼はまったく痛みを感じなくなり、頭ははっきりさえて、完全に眼をさましていた。彼はここ数日というもの、横になると痛み出して非常に苦労していたので、今初めて心地よく横になれるとすっかりくつろぎ、わたくしに背なしの腰かけの代りに安楽椅子を引っぱってきて掛けるようにいった。そうしてわたくしたちは朝の五時まで話しながら起きていたが、やがて彼は眠ってしまった。……

二十七日の夜に、ワートはこん度はフランスのモルヒネの溶液を試みた。わたくしたちはこのモルヒネの方が強いそうだから、うまく行くかもしれないと思った。わたくしたちは前の晩と同じように事をはこびながら、前の晩と同じように一刻ごとに緊張して行った。

彼が深く、ゆっくり呼吸しながら、だんだん意識を失いながら、『ぼくはお前を愛している』とつぶやいた時、わたくしはこん度こそ、それが最後の言葉だと思った。

ところが一時間かそこらすると、彼の呼吸はまだゆっくりゆっくり、非常に苦しうではあるが、途中で時々とまることがなくなって、わたくしにはこん度も死ねそうもないとわかった。わたくしは彼にさらに多くの薬を与えたものかどうかを決められなくて、三十分も苦しみとおした。もしもそれを与えればうまく行くというなら、もしも今の彼がもうちょっとで息をひきとろうとしているというのなら、彼はわたくし

がそうすることを望んだであろう。だがわたくしはどうしてもそうはできず、わたくしはベッドに入って、わたくしたち二人がふたたび一緒に意識を取り戻すまで、なんとかして無意識でいたいと思って眠ってしまった。

翌朝、彼は手帳にこう書いた。『ふたたび試みる。駄目だ。眠っただけ』昼間のうち、彼は『気分はそんなに悪くない』といっていた。

『あたしにはどうしてもできなかったわ』とわたくしはその時彼に打ちあけた。『あなたが必ずこうしろとおっしゃったことなら、どんなことでもできたでしょうけど、自分の一存で決めることはできなかったの。どうしても、もう一度薬をうつことができなかったのよ。それでうまく行ったかも知れないけれど、それでも駄目で、そのためにもっとまずいことになるかもしれないと思うと……』

『そうしなくてもよかったんだ。お前は正しかったんだよ』と彼はいった。『そうしなくて、本当によかったよ』

『それにあたし、あなたにあんなふうにして、安らかに息をひきとってもらいたいと思いながらも、やっぱり、あなたにもう一日生きていてもらって、うれしいのよ。あなたがいて下さって、本当に有難いと思っているの』

『しっかりしな』とワートは、わたくしが自分を利己的だと、臆病だと、とにかくなにかを欠いていると感じているのを感じとり、その気持ちをなだめようとしてこういったのだ。『もしも、そうできたら、三日間のばすことにしよう。このまま死んでは、あまりに心残りだから。こん度は、大みそかの夜にしよう。そのほうが記念になる。ぼくもそのほうがいいと思うよ。極上のシャンペインを一びん用意しておきな』……

大みそかの真夜中に、わたくしたちは冷えた足つきのグラスにシャンペインをつい

で、それをふれ合せて少し飲んだあと、彼は三度目を試みた。こん度は医者がすすめたと（友人の）スティーヴから教わったように緊張をほぐすために四百ミリグラムの座薬と一緒にモルヒネを用いた。彼はあせているのと弱っているために、手をふるわせながら注射をしたが、それを終えるか終えないうちに眠ってしまった。時々、二分間ぐらい、呼吸が止った。だが翌日の1955年1月1日に、彼は手帳に『新年おめでとう！』と書いたのである。

『いつでも手首を切れれば死ねるんだが』と彼は憂うつそうにいった。『ぼくはできるだけそれはのばしておきたいんだ。それは大さわぎだからね。お前だってつらからうから』

彼がそばにいる一日一日が一種の奇蹟に思えたが、その一日一日が彼から大変な犠牲を要求していたのである。しばらく前からごちゃごちゃしていてほとんど読めなくなっていた彼の字が、新年度のページをそっくりクリスに残しておくために、1954年度のうしろにノート用についているページに1955年の日附を書いて書きすすんで行くうちに、ふたたびするどく、はっきりしてきた。『三日一月曜日。一睡もしないために疲れる。なにも食べず。パッハをきく。時たまいい気持』『四日一火曜日。ひどく気分が滅入る。入浴。音楽。愛』『五日一水曜日。恐ろしい夜。だが昼になるとさらに悪し。あぶく遊びをする。それでも駄目』

『あぶく遊び』というのは、彼が空気のあぶくを静脈に入れようとした試みのことだった。……ワートは五日の日いっぱいかけて、それをなんとかうまくやろうとしたのだった。

六日のページは日附と注射についての慎重なノートはしっかり書かれていたが、あとはごちゃごちゃである。わたくしには『われわれは……あらゆる……希望を求めた最後……』という言葉しか読みとること

ができない。

七日に、彼は暖炉のかたわらでいった。『きょうが階段をのぼりおりできる最後だろう。ぼくにはもう音楽もきこえない。お茶さえ飲むことができない。煙草もまずい。ぼくはただお前の顔を見るために、生きてるだけだ』

もしも彼が望み通りの死に方をするのだったら、こん夜でなければならぬと、わたくしたちは二人とも思っていた。わたくしたちはいつも較べものにならないほど落ち着いた気持で話し合いながら、非常に遅くまで待っていた。彼はなに一つ思い通りにならないと思いつつも、どうしても、どんなことがあっても、死ななければならぬと決心して、すべてを非常に慎重に計画した。手がふるえてそれができなくなるのを恐れて、彼は最後のモルヒネの注射をした。わたくしがといたばかりのかみそりを持ってくると、彼はそれを開いた。

わたくしには彼が切る時——血がベッドや床にたれないように赤い蒸し焼きなべのうえにのせた手首から流れる血が次第に細くなり、やがて止まる時を、見ていることはできなかった。もっとも、その時のわたくしは彼を支えていなければならなかったのであるが。するとがんが、あたかも悪魔が彼と一緒に死ぬのをいやがってあばれ出すように、むっくと起きあがって、彼と争いはじめたように思えた。わたくしは彼にモルヒネを注射した。その時、あまり急いでわろうとしてガラスのチューブで指をすこし切ったので、一瞬、あたかも二人の愛を象徴するように、わたくしたち二人の血が混りあった。彼は叫び出して、子供たちをおこしはしないかと恐れ、わたくしは早く意識が消えてくれることをねがい、どんなことをしてもあなたを死なせてあげると約束した。すると彼は、『早く、タオルを。ぼくはしまりがなくなった』といったので、わたくしは彼の脚のあいだにタオルをかつ

た。わたくしは、あなたが好きよ、『あなたが好きよ、どうか死んで』といい、すると彼も、『お前が好きだ』と一言いい、それから死の最後のもだえをもだえて、彼は死んだ。』²⁰⁾

この実録的手記の著者リール・ワートンベーカーとはいかなる人物なのか。また彼女の夫チャールズ・クリスチャン・ワートンベーカーの横顔はどのようなものであったのか。二人の経歴をたどることで、この作品の重みの意味を適確にとらえ得るとは毛頭考えるものではないが、そうすることによって、そのごく一部分へなりとも接近するための手掛かりにはなり得るのではないかと考えられるので、次に本書の「あとがき」²¹⁾に記されている彼らの経歴を引用させていただくことにする。

リール・ワートンベーカーは1908年、アメリカのアラバマ州に牧師の娘として生れた。そして、一家と共にアメリカ南部のいろいろな町に移り住んだあと、ケンタッキー州のルイヴィル大学に入学したが、ここを一年で退学して世の中に出た。そして本屋の店員とか会社の事務員とかいうようないくつもの職を転々とした末、ジャーナリズムに足をふみ入れ、やがて「タイム・アンド・ライフ」社の記者になったが、ここでチャールズ・ワートンベーカーを知ったのである。

チャールズは1900年にヴァージニア州に医師の子として生れ、ヴァージニア大学を卒業した。そのあと、ペンキ屋とか船員などをやってからジャーナリストになり、その間に二、三の小説を出版している。ついで「タイム」の編集者となり、1942年に同誌の仕事でロンドンに渡った時、初めてリールとあい、二人はたちまち恋におちて、やがて結婚した。その時チャールズは42歳、リールは34歳であり、二人とも三度目の結婚だった。1947年、チャールズは「タイム」を退社し、創作に専念することになり、フラン

スのバスク海岸にあるシブールという村に身をおちつけ、1955年1月この地で息を引きとるまでに『男爵』と『王の死』という二編の小説を残し、一方リールは『四人の乙女に捧げる悲歌』と『祝祭』の二作を書いている。

「私が自分のがんを知ったのは、1954年9月27日の月曜日の午後3時45分、フランスのサン・ジャン＝ドゥ＝ルスのガンベッタ通りからちょっと入ったところにある、質素な放射線科の診療所においてである。その時間と場所については、間違いない。なぜなら、その事実は自分でさとりよりしかなかったのであるから。』²²⁾

これはこの作品の第1章「『生涯の六十日』から」の冒頭の部分である。この内容からわかるように『生涯の六十日』というのは、夫の手記である。腸部をレントゲン検査した結果、しゅようが確認され、手術をうけることになる。妻リールの友人ジェイムズ・ダニエルソン博士が外科主任をしているニューヨークのある大きな病院で手術を受けるために11月1日にニューヨーク入りし、その翌週の火曜日に彼に執刀される。手術は午前8時半に開始された。本来ならばこの種の手術には時間が長くかかるはずのものであった。ところが9時をすこしまわったと思われたころ、ジェイムズはリールの待っている病室に現われ、がんが肝臓一面にまでひろがっていて、そのため元気でいられるのは3か月と彼女に告げたのである。

第2章からは、本人の手記をはなれて妻リールとしての立場から述べられており、彼女の真情が吐露されている。彼女は述懐する。「わたくしには、彼が書きおえることができなかったことを書きつぐことは、のぞむべくもない。わたくしには彼の子供時代についてなに一つ書くことはできない。それについてわたくしの知っているのは、彼から聞いたことだけなのだから。わたくしにはわたくしたちの結婚と、二人で過

20) *Ibid.*, (同訳書, 221-231ページ).

21) *Ibid.*, (同訳書, あとがき 232-233ページ).

22) *Ibid.*, (同訳書, 2ページ).

した年月について彼が書こうと思ったことを書くことはできない。わたくしは彼ほどに正確でも、客観的でもなく、また彼ほどに筆がたたないことはたしかなのだから。だけどわたくしは9月27日から起ったことをできるだけ客観的に、できるだけ正確に語ろうと思う。なぜなら死を目の前にして、彼は生活をしっかりと見つめ、それを正しく評価したのだから。わたくしたちがもっともしばしば口にしたのは『重大な』という言葉と『重大でない』という言葉の二つだった。死を前にして、わたくしたちにはこの二つの分類が非常に明らかになったのだ。ところで、わたくしは彼と同じぐらい正直になりたいと思う。それが重大なことなのだから。』²³⁾ 彼女はさらに夫の人柄について次のように記している。「倫理的で、主義の人だった彼は、もしできれば、自分の死にたいと思う時に、自分の欲する方法で死ぬ権利があるという主張をいっていた」²⁴⁾ この夫の考え方には彼女も「わたくしもまたそう信じているのである」²⁵⁾ と述べて深い共感を示している。

この作品はこのような状況をふまえて生みだされたものである。それにしても、たとえここまで悟りきった心境に夫が到達し得たにせよ、そこに至る過程においては、微妙に屈折した意識のうごめきに苦しめつづけられ、痛めつけられてきたことはおそらくあり得ることだ。がんを自覚した1954年の9月27日から体力も気力もほとんどつき果てて翌年の1月7日の自殺に至る日々の心境はいかばかりであったか。人事を尽して天命を待つ心境にも似て、精神生活の整理、充実をはかる傍ら、死への誘惑とのし烈な戦いと孤独の絶望的なかべのために窒息寸前にまで幾度となく追いこまれたことであったか。彼の場合、安楽死を切望する気持は人一倍強くはたらいたのではなかろうか。仮にそうだとすれば、彼が最期の絶対の権利として安楽死に踏み切ったことは共感の余韻を強く残しこそすれ、

厳しい批判を招くことはすくないのではないかと思われるのである。

ひるがえってわが国の文学作品において、安楽死はどのように取り上げられているであろうか。寡聞にしてじゅうぶんな検討を加えるゆとりもないが、長谷川泉氏によれば、「医師でもあった鷗外ほど、近代作家のうちで作品中に安楽死問題を取り扱った作家はない」²⁶⁾ のことである。鷗外をしてこの問題に関してユニークな存在ならしめているのは、たんにこの種の問題を取り扱った作品が多いというだけではなく、彼自身科学的合理精神の持主であり、一定の要件が整えば安楽死を是認する考えを持っていたらしく、これを自分の愛娘について実践してみようとしたことがあったためである。この話は鷗外の二女小堀杏奴の随筆「晩年の父」に書かれているが、それによると、「鷗外の二男不律と長女茉莉とが幼時ともに百日咳にかかり、不律が先に死に、次いで茉莉もあと24時間内に死期が迫っていると見られ、その死にともなう苦痛の甚だしいことが予想されたとき、鷗外は主治医からモルヒネ注射による安楽死を施す方がよくはないかと勧められて、これにいったん同意し、すでに実行されそうになったのであったが、鷗外の岳父が強く反対したので、取りやめになった」²⁷⁾ ということである。なお、長谷川泉氏の引用によれば、その間のいきさつは次のようであった。「父も其の気になつて母に其の事を云つて聞かせたので、母も父が云うままにさうするやうな気持になつて、既う注射するばかりになつてゐるところへ母の実家の父（荒木博臣のこと—長谷川注）が見舞に来た。母は祖父に『既う茉莉はとても助かる見込はないので、某さんが注射して下さるさうです』と話すとき祖父は眼を洞穴（うろ）のやうにして大声で『馬鹿な』と云ふより大変なけんまくで『人間は天から授つた命と言ふものがある。天命が自然に尽きる迄は例へどんな事があらうとも生かして

23) Ibid., (同訳書, 15-16ページ).

24) Ibid., (同訳書, 17ページ).

25) Ibid., (同訳書, 17ページ).

26) 長谷川泉, 前掲書, 203ページ.

27) 太田典礼, 前掲書, 46ページ.

おかなくてはならない。私も子供を三人まで既う駄目だと医者に見放された事があつたが三人共立派に助かつて生きてゐるぢやないか』と云つて断然注射を行ふ事を退けさせた。某氏は『かう云ふ事は一人でも他人の耳に入つたら実行出来ません』といつてそれを中止したさうである。』²⁸⁾

明治42年(1909年)10月に刊行された「金毘羅」のなかに鷗外はその時の心境を結晶させたのである。幸にして森茉莉の安楽死は未遂に終わったが、このような苦い内的経験を味わったのち、鷗外は「高瀬舟」で安楽死を取り上げた。不律は明治41年(1908年)2月によう折し、同年茉莉安楽死未遂問題が起っている。このような経過のうちに「高瀬舟」は大正5年(1916年)1月に発表されたわけである。ただし、ここで指摘しておかなければならないことは、鷗外はその実生活においてはたしかに長女茉莉の不幸な問題で煩もんしたことであろうが、それが直接「高瀬舟」の成立に短絡したものではないらしく、その間に彼も「高瀬舟縁起」で触れているように、この作品の原拠には神沢貞幹の「翁草」が用いられているということである。即ち「翁草」中の「流人の話」がその下敷きとされていることに留意する必要がある。

鷗外が関心をもった安楽死の主題を触発した部分は、わずかに「自害をしかかり、死兼居けるを、此者見付て、迎も助かるまじき体なれば、苦痛をさせんよりはと、手伝ひて殺しぬ」という一行余りの文章である²⁹⁾。この場合、「手伝ひて殺しぬ」と語られているように、この流人の行為は明らかに自殺ほう助に当る。これに対し、「高瀬舟」の喜助の場合はどうであつたか。彼は見通しが暗い病気を苦にしてかみそりでのど笛を切り、さらにえぐるように深く突っ込んで自殺をはかったものの死にきれないでいる弟に頼まれて、そののどのかみそりを抜いてやるのだが、傷口からの出血多量のため弟を殺してしまい、その結果殺人の罪に問われたのである。

事件の概略は次のようなものである。ある秋の事、京都西陣の織場に空引をして働いていた喜助が北山の小屋へ勤め先から帰ってみると、弟は布団の上に突っ伏していて、周囲は血だらけになっていた。びっくりした兄に弟は苦しい息のしたから次のように言う。

「済まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなほりさうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思つたのだ。笛を切つたら、すぐ死ねるだらうと思つたが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思つて、力一ぱい押し込むと、横へすべつてしまつた。刃は翻れはしなかつたやうだ。これを旨く抜いてくれたら己は死ねるだらうと思つてゐる。物を言ふのがせつなくつて可けない。どうぞ手を借して抜いてくれ」³⁰⁾

喜助は弟ののどの傷を見て医者を呼んでやろうとするが、弟は左手でのどをしっかりと押えて、「医者がなんになる、あゝ苦しい、早く抜いてくれ、頼む」³¹⁾と言い、それからしばらくしゅん巡している兄を恨むような目つきで見つめるばかりである。喜助はなすすべもなく動転するのだが、弟の恐ろしい催促を物語る視線の迫力に圧倒されてしまい、彼の願いをかなえてやることにする。

「それ(弟の目のこと一関口注)を見てゐて、わたくしはとうとう、これは弟の言つた通にして遣らなくてはならないと思ひました。わたくしは、『しかたがない、抜いて遣るぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと変つて、晴やかに、さも嬉しさうになりました。わたくしはなんでも一と思ひしなくてはと思つて膝を撞くやうにして体を前へ乗り出しました。弟は衝いてゐた右

28) 長谷川泉, 前掲書, 142ページ。

29) 長谷川泉, 前掲書, 204ページ。

30) 森鷗外, 「高瀬舟」, 河出書房, 現代文豪名作全集森鷗外集, 309ページ。

31) 森鷗外, 前掲書, 309ページ。

の手を放して、今まで喉を押へてゐた手の肘を床に衝いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしっかりと握って、ずっと引きました。』³²⁾

その時の喜助のとした具体的な行動を鷗外は次のように書いている。

「わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜かう、真直に抜かうと云ふだけの用心はいたしました、どうも抜いた時の手応は、今まで切れてゐなかつた所を切つたやうに思はれました。刃が外の方へ向いてゐましたから、外の方が切れたのでございませう。』³³⁾

これで見れば、喜助の行動には、新しいところを切る意志は察せられない。明確な殺意も感ぜられない。かみそりを抜けば死ぬかもしれないことを考えながらも、出来れば弟の命を助きたい兄としての情がはたらかなかつたとは言いきれない。ところが鷗外の作品の中での解説によると、喜助の行動を若干割り切つたものとしてとらえている。

「弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだらうから、抜いてくれと云つた。それを抜いて遣つて死なせたのだが、殺したのだとは云はれる。しかし其儘にして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐へなかつたからである。喜助は其苦を見てゐるに忍びなかつた。苦から救つて遣らうと思つて命を絶つた。』³⁴⁾

かみそりをうまく抜けば死ぬるだろう、という弟の論理が絶対であるか否かについても疑問の生じる余地がないわけではないが、喜助がかみそりを抜いた時に傷口を拡大したか否かにつ

いては、さらにあいまいにされている。これは長谷川泉氏も指摘しているように「鷗外の記述は、その辺微妙であつて、故意にあいまいな表現を用いたとも考えられる。喜助の行動と罪科が過失致死だとする法律論があるゆえんである。もちろん当時、安楽死は認められていなかった。医師である鷗外が、公然そのことを是認する立場での主題を盛ることはできなかった」³⁵⁾のであろう。

鷗外は「高瀬舟縁起」のなかで、「高瀬舟」には「財産の観念」と「安楽死」の二つの主題が含まれていることを明かし、安楽死の問題を「翁草」の「流人の話」にもりこんだいきさつを述べている。

「こゝに病人があつて死に瀕して苦しんでゐる。それを救ふ手段は全くない。傍からその苦むのを見てゐる人はどう思ふであらうか。縦令教のある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの苦みを長くさせて置かずに、早く死なせて遣りたいと云ふ情は必ず起る。ここに麻酔薬を与へて好いか悪いかといふ疑が生ずるのである。某薬は致死量でないにしても、薬を与へれば、多少死期を早くするかも知れない。それゆゑ遣らずに置いて苦ませてゐなくてはならない。従来の道徳は苦ませて置けと命じてゐる。しかし医学社会には、これを非とする論がある。即ち死に瀕して苦むものがあつたら、楽に死なせて、其苦を救つて遣るが好いと云ふのである。これをユウタナジイといふ。楽に死なせると云ふ意味である。高瀬舟の罪人は、丁度それと同じ場合にゐたやうに思はれる。私にはそれがひどく面白い。かう思つて私は「高瀬舟」と云ふ話を書いた。』³⁶⁾

このような鷗外の発想をたどつてくると、

32) 森鷗外、前掲書、310ページ。

33) 森鷗外、前掲書、310ページ。

34) 森鷗外、前掲書、310ページ。

35) 長谷川泉、前掲書、204ページ。

36) 森鷗外、「高瀬舟縁起」河出書房、現代文豪名作全集森鷗外集、312ページ。

「高瀬舟」の喜助の行為は、微妙な問題点を残し、多少あいまいな表現によりながらも、実質的には自殺ほう助に近いものとしての解釈が成り立つような気がする。そしてこれも鷗外の安楽死に対する発想が奈辺に求められるかという疑問を明らかにする手掛かりの一つにはなるであろう。

IV む す び

昭和48年1月27日付「毎日新聞」の夕刊の報道によると、英紙「タイムズ」からのニュースとして、西ドイツ・バイエルン州の医師、ワルター・クラウス・マイヤーホフ博士はミュンヘンの医学雑誌「クイック」最新号で、30ないし40件の安楽死を実行したことを告白して、同博士が「ある患者が手の施しようがなくなった場合、自らの熟慮および同僚との協議の結果、苦しみを減らすためにあらゆる手段を尽くすのは医師としての義務だと考える」と述べたこと、またオランダでも、最近女性医師が不治の病床にある自分の母親を安楽死させて起訴され、これをきっかけに18人の医師が同様のケースで安楽死を行なったことを告白し、衝撃を与えた事件が起きたことが伝えられている。同じく「毎日新聞」の昭和49年11月9日付朝刊によると、スコットランドのスターリングシャー州オールドポルモントに住む医師のジョージ・メイア氏(60歳)は、その自伝『一外科医の告白』の中で、1936年以来、英国各地の病院で14年間医師をつとめていたとき、「その間に安楽死させた患者の数は覚えていないがその数は少なくない」といっている³⁷⁾。さらに昭和47年10月2日付の同

37) このような医師による安楽死の例はその他の国々においても枚挙にいとまがないのであるが、最後に2つの例をつけ加えよう。1つは「オーストラリアの某女医が300人を安楽死させたと告白したこと」(『文芸春秋』第51巻第33号、277ページ)があったという事例であり、2つは、若干視点は異なるが、我国でも昭和39年12月、東京都世田谷区内で開業している内科・外科の医師360名を対象に調査したアンケートによる(使用サンプル数131)調査結果である。それによると、患者が現代医学上不治の病に冒され、死期が切迫しており、死にまさる激烈な肉体的苦痛を伴ない、しかも本人が速かな死を切望し、親族も本人の意志を尊重したいという假定事例に現実と直面したら、医師としてどういう処置をとりたくお思い

紙朝刊は、東京の練馬区で起きた事件として、寝たきりの82歳の老夫がぜんそくの発作に苦しみ、「いっそ殺してくれ」と妻に頼み、それを見るに見かねた76歳の老妻が首をしめて夫を殺してしまったことを伝えている。

文学作品に限定して安楽死を考察する心積もりであったのに、このような各国の実例引用にまで手をつけざるを得なくなってしまった。それはあらためてふれるまでもないことではあろうが、文学作品における安楽死の発想が必ずしも絵空事ではなく、事例によってはむしろ現代のこの問題を冷徹に予見している場合さえあるということである。不治の傷病に苦しむ者がその末期に際して、無用の苦痛をいたずらに長びかせないために、死を強く願望した場合、いわゆる正常な社会生活を送っているものが、正常な社会の規範倫理をたてに、それをことごとく拒否すべきであろうか。「末期がんや全身不随の苦しみも、本人だけが直面する極限状況だ。それから逃れようとする願いを正常な社会のタブーをもって拒否できるだろうか。」³⁸⁾ こうしたケースをも含めて、安楽死の多種多様な問題点が、文学の世界では数世紀以前から取り上げられてきたのである。その先見性の適確さにはただただ驚き入るばかりだ。しかし小論では、わずかに7作品しか取り上げず、限定されたとく狭い視野から微視的にしか安楽死を検討できなかったものであり、したがってここから早急に断定的な結論を下すことはできないし、またそうするつもりもない。所懐をもってこのむすびとしたいゆえんである。これらの7作品に関する限り、T. シュトルムの『告白』を除けば他の作品はすべて安楽死を肯定する立場から書かれている。しかもそれらの中で、『ユートピア』、「機械は停る」及び「廃墟の恋」などは、いわゆる合理的発想礼賛の社会体制下での一問題として

38) ですが、との質問に対して、平均的には3%の医師が直ちに何らかの方法で死なせてくれ、73%が生命の短縮を知らながらも苦痛除去(緩和)のために麻薬を投与してくれ、17%が特別な処置をしないでよくと答えている。

(太田典礼『安楽死』クリエイト社、254ページ)。

38) 毎日新聞、昭和49年11月13日付朝刊、「複眼時評」欄。

安楽死をとらえているために、それに対する関係者及び一般大衆の態度も、必然的に合理思想の思い体系に組みこまれたものとして制約を受けざるを得なくなる。これらの作品はやや極端な世界を志向しているものとみれば例外的に考えられなくもないが、問題は小論に取り上げたその他の作品のようにこれら3作品と比較してみれば、それほど過激な発想をとっていない場合である。比較的妥当な発想とはいえ安楽死肯定の立場にたっている以上、これらの作品、『安楽死—愛は死を見つめて』、『息子と恋人』それに「高瀬舟」なども、好むと好まざるとによらず合理的発想の所産の一種とみなされてもやむを得ないかもしれない。昨今では世界の数か国において安楽死の立法化運動が徐々に進められているとのことであるが、相変らず根強い反対があるらしい。安楽死立法化反対の強力な

論拠としては、生命の尊重があげられているようではあるけれども、果してそうであろうか。安楽死を立法化し、安楽死を社会的に是認させた場合に、否定論者がもっとも恐れることは、ナチスの大量虐殺の前例もさることながら、戦争において殺人が合理化されるのに似て、一般社会生活のなかにおいてもややもすれば生命軽視の風潮がはびこり従来の倫理観が根底からおびやかされる可能性を否定し得なくなることであり、人間性の一部に潜む冷血に対する限りない不信感がほう芽することではないのか。安楽死の問題に軽々に合理的発想を持込むことには慎重でありたい。この問題に関する限り、それは判断基準が狂えばきわめて始末の悪い方向へ拡大される危険性をはらんでいるようにも思われるからである。